

問題 6. 唾液腺導管癌

症例：77歳、男性。右耳下部の腫脹。

検体（採取法）：耳下腺（穿刺吸引）

染色：パパニコロウ染色

問題：正しいものに○、間違っているものに×を下さい（VS：バーチャルスライド）

1. VSでは、背景は粘液性である。 ×
2. VSでは、出現細胞に核異型が目立つ。 ○
3. アンドロゲンレセプターが高率に陽性となる。 ○
4. リンパ節転移や遠隔転移を起こしやすい。 ○

解説

VSでは著明な壊死性背景中に、腫瘍細胞が重積性を示す不整な大型細胞集塊として採取されている（図1）。背景に粘液はみられない。腫瘍細胞は多形性のある類円形～卵円形の大型核を有しており、核クロマチンは粗顆粒状で、明瞭な核小体が認められる（図2）。腫瘍細胞の細胞質は豊富でライトグリーン好性顆粒状である。腫瘍細胞には明らかな粘液や角化はみられない。以上の所見から、高悪性度の癌が考えられ、唾液腺導管癌が推定される。

鑑別診断として高悪性度粘表皮癌や扁平上皮癌が挙げられる。本症例では中間細胞や粘液細胞がみられないところが高悪性度粘表皮癌と、角化扁平上皮様細胞がみられないところが扁平上皮癌との鑑別点となる。

摘出検体の病理組織像では、高異型度を示す浸潤性乳管癌に類似しており、最終診断は唾液腺導管癌であった（図3、図4）。

唾液腺導管癌は高齢男性の耳下腺に好発する高悪性度腫瘍で、高率にリンパ節や遠隔臓器への転移をきたす。免疫組織化学的にアンドロゲンレセプターが陽性となることが多く、他の唾液腺癌との鑑別に役立つ。また、HER2が約40%の症例で強陽性を示す。

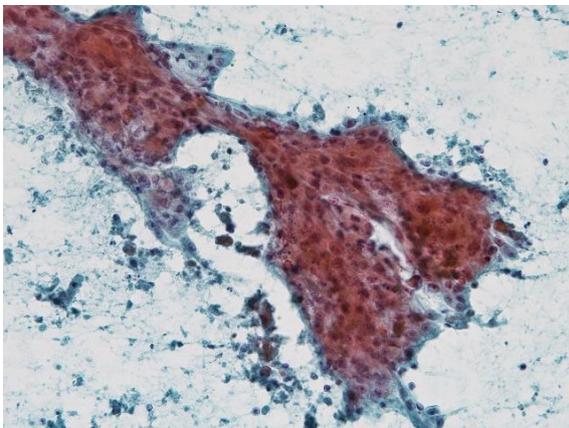


図 1

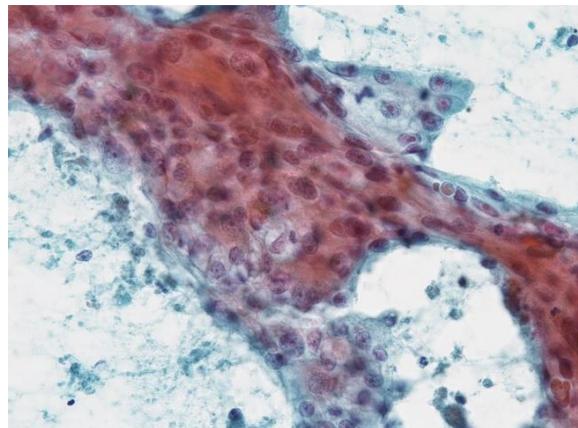


図 2

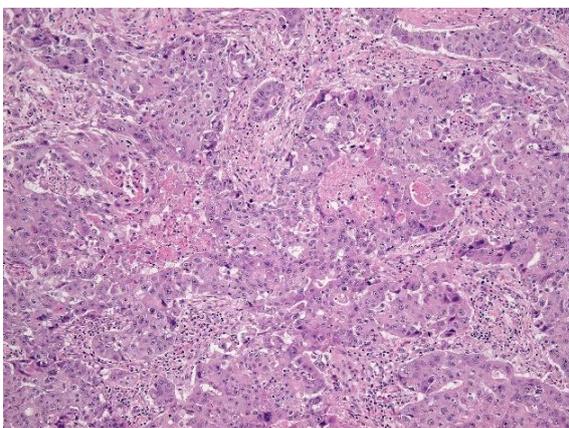


図 3

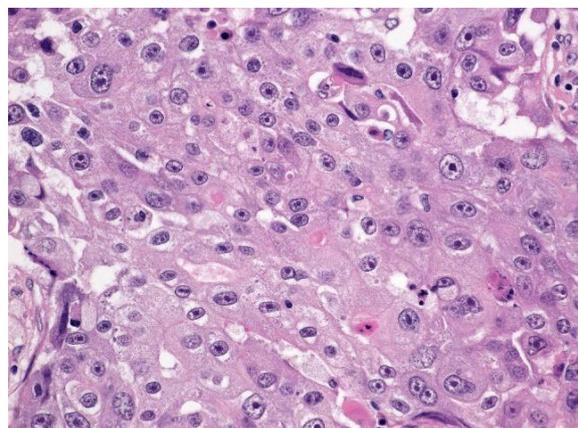


図 4